

地域支援を行う保護者として療育 で大切にしてほしいこと

日置 真世

自己紹介

3つのアイデンティティ

①当事者としての自分:レット症候群の長女(31歳) 1歳半健診後にフォローとなり、2歳前に療育相談にて遅れを指摘されて、療育につながる。当時の肢体不自由児通園施設に母子通園すること4年(下の妹たちも連れて)、養護学校(小、中、高)を経て、フルで福祉サービスを利用しながら在宅生活を継続。+ASDでとても気難しく、思春期に二次障害を発症した次女(29歳)と唯一定型発達の三女(26歳)の子育ての経験

②インフォーマルソーシャルワーカーとしての自分:フォーマルSW時代(2008~2011年までSSW)をきっかけに出会い始めてしまった、子ども時代を奪われた若者たち

→どんな子どもにも「豊かな子ども時代を保障する」ことが療育の本質なのでは?障がいだけでなく、環境的なハンディキャップにも同じように保障すべき(ケースワークも、グループワークも、そしてコミュニティワークも!)

③研究者・活動家としての自分:大切なことを理論化して、発信する、自分だけではなく、共に発信する仲間(特に当事者)を増やす

私の療育の原体験

自分の思いを受け止められなかったこと
普通はこう思うはずだと決めつけられたこと
自分の子育てを否定されたこと

その裏には、発達の遅れがある長女のことを改善が必要なよくないものだとジャッジされていることを感じていたのかも(健診や相談、療育の場で感じ取った「ひっかかった感」「気の毒、同情される感」「持ち上げられる感」)

→親の会活動や親同士ではなかったもの

若者たちとの活動を通じて学んだこと

- ・大切なことは、本人に聞くこと、相談すること(本人置き去りの支援はあるある)
- ・支援という機会を通じて、社会と自分自身と向き合う仲間になること
- ・支援者はいつも優位な立場にいることを自覚する(社会的優位性がある)
 - 正しいことや望ましいことがいつもできるわけではない
 - いくら自覚しても、高いところ、安全なところから物を見ている、伝えている
- ・支援より先に、権利保障ができるかどうか(ソーシャルワークの視点が必須)
 - 土台を保障せずに、正論を語るのは何の効果もない

最近、付き合いの長い若者から「同盟関係づくりがうまい」と評されたけれど、それが私が経験からたどり着いた一つの方法なのかもしれない

大切にしてほしいこと ナラティブを尊重すること

超気難しく、生きづらい次女がたどり着いた「ナラティブ理論」が療育(だけでなく、対人援助に全般)で大切なことに気づいた

私の原体験は自分が体験した「ナラティブへのダメージ」だった！

ナラティブ=感じたこと、考えたこと、自分が自分であるという感覚

ナラティブとして見えるのは「自己表現」(感情表出、しぐさ、言葉、行動など)

「感じたこと」「考えたこと」そして、「あなたがあなたであること」

まずは受け止めて、共に過ごす、共に生きていくために一緒に考えたいことがあれば、「私は、こう感じる」「私は、こう考える」「あくまでも、私は私で、あなたはあなただけど、一緒に考えたい」というメッセージを伝えて、さらに必要があれば相手と交渉をすること(できるだけフェアに伝える)